

学校教育目標	かかわりの力を育てる	目指す児童生徒像	「元気にあいさつできる人(自立)」	「楽しく運動できる人(健康)」	「仲よく生活できる人(協力)」
--------	------------	----------	-------------------	-----------------	-----------------

【 評 価 】 達成度 : A 達成できた (8 割以上) B ほぼ達成できた (6 ～ 7 割) C あまり達成できなかった (4 ～ 5 割) D 達成できなかった (3 割以下)
保護者、教員アンケートによる評価 < A ～ D の 4 段階評価のうち A と B 合計の割合 > : 達成できた (8 割以上) ほぼ達成できた (6 ～ 7 割) あまり達成できなかった (4 ～ 5 割) 達成できなかった (3 割以下)

No	項目	経 営 の 重 点	具体的方策・評価指標等	達 成 状 況	達成度	課 題 及 び 改 善 策
1	早く登校したくなる楽しい学校	(1) 日常の指導を目標、内容、評価から検討し、教育課程を見直します。 保護 3 (92.7%) 教員 3 (84.5%)	(1) ①小学部と中学部における各教科、自立活動の設定ついて継続検討を行う。学期末に評価期間を設け、学習の評価をじっくり検討できるようにする。 ②前年度に次年度の年間指導計画を作成し、年度初めに全職員が利用できるようにする。活用できるように教材備品や学校図書を整備し、管理簿等で管理する。	(1) ①各学部において、学部会等で検討してきた。7月と12月には評価期間を設けるとともに、学部ごとに提出期日をずらし、評価の検討時間を確保した。 ②年間指導計画は、年度当初に利用できるように準備できた。来年度の方も作成に取り掛かっている。学習教材、備品点検を定期的に行うようにしたり、管理簿等も作成した。	A	(1) ①重複学級の自立活動の指導の充実(学) ②領域・教科を合わせた指導の充実(学) ③小学部、中学部の教育課程の検討(学) ④指導形態についての再検討(学) ⑤集団指導の中の個別化(教) (2) ①チーム検討会の運営細部(学)
		(2) チーム検討会を開き、個別の指導計画等を下に複数担当者で子どもの活動や支援方法、評価等を検討し授業の改善を図ります。 保護 3 (92.7%) 教員 4 (89.7%) 教員 8 (91.4%)	学校評議員会より ・授業や掲示物を見て、本当に情熱を込めて一生懸命に指導していることがよく分かった。様々な教室でいろいろな体験をでき能力を高められる環境があり、通常の学校より恵まれてると感じる。	(2) ①授業案の検討時に、それぞれの児童に合う支援の仕方(教材や働き掛け、教師の連携等)や、そのねらいに合う席順や場の設定の工夫をしてきた。またその反省を次時に生かした授業づくりができた。		保護者アンケートより ・高等部は個人差が大きい。一人一人に応じた支援がもっと必要である。 ・事前練習、学習をもっと大切にして欲しい。
		(3) これまで取り組んできた学校間交流、地域交流等の活動を継続、充実します。 教員 7 (87.9%)	(2) ①チームで取り組める良さを生かし、授業の計画時から個別の目標支援について話し合い授業を進める。終了時のまとめも行い、評価に生かし反省して次の単元に生かす。	(3) ①すべて児童生徒の実態に合って、見通しをもって参加でき、楽しさや充実感を感じることができた。東北文教大学との交流で得た手遊びやダンスなどは今後の授業でも活用していくことができる。		②一人一人の実態に合わせた支援や指導(保) ③合わせた指導や自立活動などの研修の必要性(教) (3) ①居住地校や学校間での交流の動きだし時期(学) ②南山形地区文化祭前後の校内行事の調整(学) ③分校職員との連絡調整(学) ④保護者の参加意識の向上(学) ⑤目に見えるような地域との交流事業(保) ⑥地域への目に見える情報発信。(教)
		(4) グラウンドが使えない期間の運動量の確保に努めます。 保護 4 (89.5%) 教員(72.4%)	(3) ①小学部では、山麓の重複学級と居住地校交流と東北文教大との交流を進めていく。中学部は昨年度の実践を踏まえ、東北文教大学との交流を進めていく。高等部は、1年生は山麓交流、2年生は城山太鼓体験、3年生は南山形地区文化祭参加と今年も継続していく。 ②PTA日より(広報部)を他校、地域、関係機関に送り本校の児童生徒の学習や生活への理解を図る。	(4) ①すべての児童生徒の実態に合って、見通しをもって参加でき、楽しさや充実感を感じることができた。東北文教大学との交流で得た手遊びやダンスなどは今後の授業でも活用していくことができる。		保護者アンケートより ・もう少し地域との交流があった方がよい。地域の方々からの理解と協力が得られている実感が無い。 ・地域の方々への情報発信がどれくらい行われているのかわからない。 ・各種行事等にも地域の方々の自由参観があってもよいのでは。
2	安心してまかせられる安全な学校	保護 2 (97.6%)	(4) ①体育館を使つての保健体育の学習の工夫や代替グラウンドを使つての学習を工夫して運動量の確保に努める。	(4) ①毎日の体育でダンスとランニングを行い、運動量の確保ができた。冬季のため、体育館での学習をしている。	B	保護者アンケートより ・地域の方々へ発信していたか疑問。
			学校評議員会より ・教員のアンケートで低い項目の一つなので、何とか課題解決を図って欲しい。			(4) ①保健体育や運動量を確保する活動の早期計画(学) ②運動量の確保と体力づくりの習慣化(保) ③運動量確保に向けた工夫。(教)
						保護者アンケートより ・もっと走って体力づくりを習慣化して欲しい。 ・体育館を自由に使用できず、グラウンドも工事中でのびのび運動できるのか。
2	安心してまかせられる安全な学校	(1) ヒヤリハットについて共通理解を図り、事例をできるだけ多く集めその分析をもとに具体的な改善策を導き出し事故の未然防止に努めます。 保護 1 (95.2%) 教員 1 (94.8%)	(1) ①常に子どもの行動を予測し、危険性を把握するとともに学習環境を整え安全に学習できるようにする。 ②登下校指導や乗車指導、交通安全教室や防犯教室を計画的に実施し、生徒の事故防止に努める。 ③毎月始めにヒヤリハット記入の呼びかけをする。事故報告ではなく、事例を多く集められるように、呼びかけをしていく。	(1) ①ヒヤリハットを共有し、教室環境や学習中の場の設定を工夫し危険防止に努めた。大きな怪我がなかった。 ②登下校指導では毎回実施後に生徒部員・高等部職員全員に記録を回覧した。学部を超えて生徒の様子を把握することができ、指導に生かすことができた。安全や不審者対応教室では、毎年繰り返すことで事故防止策を学ぶことができています。 ③呼びかけは行ったが、ヒヤリハットの話話が話しでは出るが記入まで至らないことが多い。	A	(1) ①事故を未然に防ぐ手立て(TーTの役割、危険箇所把握、ヒヤリハット共有)(学) ②パニックなどへの対処法の共有化(学) ③PTA向けの安全指導指導の研修(学) ④単独通学生徒の指導や許可基準の再検討(学) ⑤駐車場での安全な送迎(保) ⑥学校でのけがの防止と汚した場合の説明責任(保) ⑦クールダウンさせる場所の確保。(教) ⑧ヒヤリハットへの意識向上。(教)
		(2) 校内の就学や進学についての相談支援体制を見直し在籍児童生徒についての教育支援の充実を図ります。 保護 5 (96.0%) 教員 5 (79.3%)	(2) ①就学や進学について保護者の考えを丁寧に把握すると共に生徒の実態、担任の考えも踏まえながら学部で検討していく。さらに、必要に応じて保護者との面談を適時行ったり、関係機関と連携を図ったりしながら就学指導、進路指導の充実を図る。	(2) ①福祉との連携の必要な生徒について、会議をもったり、日頃連絡を取り合ったりし、指導に生かすことができた。必要な方について適切に実施できたのでは。1, 2年段階から進路について研修する場を設定(保護者向け)することになりよかった。校内就学指導委員会を今年度は2回行い、外部関係機関との連携や保護者との面談等を進めることができた。	B	保護者アンケートより ・駐車場の誘導で「ヒヤッ」とした時が何度かあった。 ・学校でのけがについて、状況説明が明確でなく納得できないこともあった。 ・教室の配置もあり、先生方の目が届いているの

		(3) 複数の目で検討するケース検討会を迅速に開き、いじめ等も含め大きな事故の未然防止に努めます。 保護 5 (96.0%) 教員12(100%)	②校内就学支援体制を作り、職員間で共通理解を図る。在籍児童生徒の進学について、検討が必要な場合は、随時、校内就学支援委員会を開き、総合的観点から話し合いを行い、方向性を決定する。 学校評議員会より ・学校にいれば、学校にお任せで安心していただけるが、卒業後にはそうも行かないので、保護者同士悩みを話し合える場づくりが大事である。 ・ケア会議をもったが、よく会議の目的を理解されていないようで、戸惑っていた先生方もいた。 ・就職1名というのもすばらしい。進路指導主事から話を聞くことが多いが、村特は相談所を使ってとてもうまくやっている。 (3) ①学部会、学年会で気になる生徒、対応を検討すべき生徒が上がった場合は、担任、学年主任、学部主任でケース検討会の実施について常に検討していく。 ②現場実習等でのトラブルなどに対しては、速やかに関係職員及び事業所担当者、保護者、本人と話し合いをもち今後の対策と方向性を示す。 ③学部を超えて情報交換を行い、教職員全員で児童生徒を支援する体制を作る。必要があるときにはケース会を開きアセスメントを実施して、チームとして協働して解決に取り組む。	②4月に校内就学支援体制を組織し全職員で共通理解を図った。中学部生徒1名について、校内就学委員会を実施した。委員会での話し合いを受けて、担任が中心となり就学指導を進めた。 (3) ①実際にケース会を依頼し実施したのは3件。話し合われた内容を指導場面に生かしたり、保護者や関係機関に連絡したりして問題の解決に向けて動いているケースもある。 ②特に大きな問題がなかった。対策や方向性について示すことができた。 ③これまでケース会議を5回開き、児童・生徒の課題の克服について協議した。分掌部会では毎回各学部の児童・生徒について情報交換を行ってきた。事故発生時に迅速に対応し、校内外において安全に落ち着いて生活できるよう安全指導や生活指導を行った。また、指導後の生徒の生活の様子について、学級担任だけでなく同学部の生徒部職員や生徒指導担当、学部主任と複数で観察することができている。	A	か不安になる。 教員アンケートより ・クールダウン用の部屋があればいい。 ・ヒヤリハットは紙に起こして視覚化を図ってはどうか。 (2) ①進路についての保護者の理解と連携促進(学) ②現場実習先の事業所開拓(保) ③作業たより等での授業の様子のお知らせ(保) ④小学部高学年から中1、2年生での進路指導の充実。(教) ⑤学部毎の保護者向け進路研修会の実施。(教) 保護者アンケートより ・現場実習の事業所の開拓をもっと多くして欲しい。 ・作業学習の様子がわからないので、たよりなどで知らせて欲しい。 教員アンケートより ・高学年に向けて進路情報が必要。 ・中1、2年時の進路指導の充実。 ・学部毎の保護者向け進路研修会が必要。 (3) ・配慮の必要な児童生徒についての情報の共有(学)
3	相談や支援を受けられる頼りになる学校	(1) 公開研究会の開催を広報し、他校教員から意見をいただく機会を設けます。 保護 6 (89.5%) 教員 6 (94.8%) (2) 県や山形市の教育支援に協力し、障がいのある子どもの教育相談を担当します。 教員 9 (96.6%) (3) 要請のある学校の指導支援等に積極的に対応します。 教員 9 (96.6%)	(1) ①10月と11月に各学部の授業を公開し、広く内外の先生方から意見をいただいて指導に生かす。 ③学校ホームページを活用し、公開研究会や教育相談等についての情報を公開する。 (2) ①村山教育事務所からの依頼に応じ、就学に係る教育相談を実施する。保護者への聞き取り、児童生徒への検査、様子観察等を行い総合的観点から判断報告する。 ②山形県障がい児教育支援委員会、山形市教育支援委員会の調査員、にこにこ相談員、巡回相談員を置き、依頼に応じて調査、検査を行い、判断に必要な資料を整える。 (3) ①相談部を中心に各校の支援をしていく。その際、出張で教員が欠けた学年の補欠体制を学年を超えて協力していく。 ②特別支援巡回相談事業の巡回相談員として、幼稚園・保育所、小・中学校及び高等学校からの要請に応じ、障がいのある児童生徒の指導支援や研修会の講師、授業研究会の助言等を行う。	(1) ①10月に小中、11月に高等部の公開研を実施し、校外の先生方から多くの意見をいただくことができた ③ホームページを定期的に更新し、必要な情報を提供することができた。 (2) ①依頼のあった就学に係る教育相談について、その都度日程を組み、保護者への聞き取り、児童生徒への検査等を実施した。相談後は、報告書をまとめ、村山教育事務所、教育庁義務教育課へ速やかに報告できた。 ②依頼に応じて、担当者が山形市就学指導委員会、にこにこ相談に出向き、教育相談や検査等を行い随時報告した。 (3) ①巡回相談等の補欠体制を学年を越えて組むことができた。(担外の協力も大きかった。) ②幼稚園や小学校より、幼児児童の支援についての相談、授業研究会の助言、各種研修会の講師等の依頼があり、随時実施した	A A A	(1) ①校内授業研、公開授業研への学部の取組(学) ②参加しやすい授業参観と回数の増加(保) 保護者アンケートより ・働いているため、思うように授業参観に出席できない。午前中限定でないといい。 ・授業参観の回数が少ない。子どもからの情報が少ないのもっと見る機会が欲しい。 ・授業参観に行きづらいぐらい規制があるように感じる。 (2) ①研修を行い専門性の向上(学) ②センター的機能を充実させるための後補充の工夫(教) (3) ①研修を行い専門性の向上(学) ②センター的機能を充実させるための後補充の工夫(教)
4	働きやすいやりがいのある学校 教員 10 (87.9%)	(1) 2つの分校との連携を構築します。 教員13(82.8%) (2) 月1回の「定時退校日」の確実な実施に取り組みます。併せて、会議の持ち方等についても検討を継続し子どもや授業のために使う時間の創出に努めます。 保護 7 (91.1%) 教員11(70.7%) 教員14(94.8%)	(1) ①行事や校外学習等の早めの計画、共有ファイルや電話ファックス等の活用、共通の教材使用等ができるように、連絡を密にしながら授業を進める。 ②小学部の運動会、むらとくまつり、作品展への出展などを共同で計画し、実施できるようにする。 (2) ①定時退校日には前もっての声がけに努め、その日には会議を設定しないことにする。会議内容の簡略化や時間の短縮などが行えるよう、提案時間について担当者に申告するようにする。 学校評議員会より ・特にゆとりづくりを行って子どもとの関わる時間を確保するための方法を検討してほしい。家での持ち帰りや休日出勤などが出てくるが、気持ち的にメリハリを持たせて仕事に向ってもらいたい。 ・教師の業務の見直しを何とかできないものか。どうしても必要なものしか作らないという声がけはいいと思う。月1回でも、月2回でも、今日は5時で帰ろうというゆとりがあると、生徒にもゆとりを持って向き合える。 ・いい教育には精神的にも体力的にも健康である必要がある。できるだけ、家庭人としても過ごしてほしい。いろいろな配慮も大切。	(1) ①早め早めに話し合いの場を設定し、分校の教員と一緒に考えて行事や交流ができた。また、全体での交流の予定を児童の実態に合わせ、必要な学年の交流に変更したことが良かった。 ②作品展の出品、いのちの絵本の貸出等で、分校の希望を聞きながら実施できた。 (2) ①毎月の定時退校の日は、5時過ぎに仕事を終えて帰るといった意識は出てきた。やむを得ず会議日となっても簡潔に終えることができた。学部会の運営は、なかなか短時間ではいかなかった。提案は簡潔であったものの、検討などに時間を要した内容が多かった。学年会も定期的に行うことができた。	A B	(1) ①分校との連絡調整と、3校間の連絡会の運営(学) ②分校とのデジタル情報の共有化とその方法(学) ③二つの分校と本校の三校の連絡調整の工夫。(教) 教員アンケートより ・二つの分校との調整が難しかった。 (2) ①分掌部の業務と人数の再検討(学) ②業務内容の見直しと削減(学) ③諸会議設定の再検討と持ち方の工夫(学) ④短縮日課の増加(学) ⑤保護者と教員のコミュニケーション(保) ⑥高等部の事務整理時間の確保。(教) ⑦仕事量の偏りの解消(教) ⑧業務の見直しと定時退校日の取組(教) ⑨評価週間の継続(教) 保護者アンケートより ・担任をしている保護者以外にはあいさつが少ないようだ。また副担任の先生からはあまり積極的に子どもの様子を教えてもらっていない。